

山形発ランドスケープアートの海外での実践展開

Approach to Introducing Yamagata Landscape Art Overseas

安部 定

ABE Sadamu

Advancements in transportation and information networks have contributed to rapid globalization in the international community. As evident in the introduction of Europe's new currency, the new Euro, this trend is only likely to accelerate. The field of art is no exception. Artists around the world are now looking beyond the constraints of history and tradition to develop a new common language with a "modern" theme. In the process, they are searching for new challenges and exploring new possibilities and modes of expression. In this day and age of free-flowing information, even aesthetics and artistic expression are taking on a new global dimension. In any age, however, it is important that expression retain a certain degree of originality. This means that art is continuously in the process of coming together to find a common denominator then breaking off to create something new.

A new concept in art, referred to as "environment art," has recently emerged on the scene. In general terms, the word environment can apply to everything from the ecology to our daily living environment or even to the world of information. The environment with which I am concerned, however, is that of the genre of "landscape art." This is because the landscape genre, by nature of it being closely entwined with nature and the climates, is able to offer those qualities unique to each region, which are so sought after during the current trend toward globalization.

1. はじめに：

ランドスケープアートの意味するもの

交通環境、情報環境が発展し国際社会のインターナショナル化は急速に進展してきている。ヨーロッパにおけるユーロ通貨の登場に見られるように、その傾向にはいっそう拍車が掛かってきたと言える。芸術の分野においても歴史や風土の縛りを越えて“現代”という共通言語を命題とし、世界中の芸術家が新たなテーマの探求、表現のあり方、可能性を模索している。情報が飛び交う中、表現もまた感性すらもインターナショナル化してきていると言っても過言ではなかろう。しかし同時に表現には独自性が求められることも事実であり、その実体はそれぞれに反対方向へ発展しようとしている常に表裏一体の関係のものだと言える。

近年「環境アート」という概念が生まれてきた。「環境」を広義にとらえるとエコロジーからはじまり情報環境や生活環境など幅広いが、私はランドスケープアートというジャンルに注目している。それは風景としての風土・環境との関わり方であり、インターナショナルな中で地域に題材を求める独自性の模索でもあるからである。

2. 最上環境芸術祭における山形版ランドスケープアートの成立

アートのインターナショナル化の中で、「ランドスケープアート」を積極的に位置付けようという動きは日本でも既に展開され始めている。昨年の日本におけるアートシーンで最も話題を集めた「第1回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000」もまさにランドスケープアートの総決算型のイベントであった。そこで展開された作品群には常設されているものも60点ほどあり、今も国内外から訪問者が続いているという。

これに先駆けること4年、'96年10月に山形県より委託を受け、最上地区で小規模ながら同様なイベントを実施した。山形県が掲げる最上エコポリス構想実施事業の1つとして新庄市を舞台に開催した第1回「最上環境芸術祭」である。実施に際しては私が大学内に開設した「実験表現研究会」のメンバーと共にあたった。環境芸術のカテゴリーからエコロジカルアートと、ランドスケープアートという2つの柱を中心テーマに掲げ展開したもののだが、今もランドスケープアート部門はコンクール形式で継続されており、応募は北海道、関東、関西方面からもあり企画意図への共感が多い。地域でも理解が広まり現代アートが日本の地方小都市に根ざしてきた好例であろう。

3. 国際舞台での成功と地域アイデンティティー構築へ

この第1回「最上環境芸術祭」は企画からプロデュースを任されると同時に、作家として作品も2点出品した。1点は舞台となった新庄市の位置をテーマに、同経度上の6つの町から映像と、品物を採取して展開したビデオアート「生命線140° 18' 18"」。これは空き店舗に展示。もう1点は収穫後の休耕田(200m×900m)に日本の秋の風物詩でもある赤銀、金銀の防鳥テープを約3,000本張り渡し、輝く陽の光と渡る風の波を送り込んだランドスケープアート「最上颯爽」である

この「最上颯爽」を2000年夏にドイツ・リンダウ市で実現してくれないか、という打診が1999年2月にリンダウ市観光局長のシュトゥップナー氏から寄せられた。これは'98年にドイツを訪れた際に知人のドクター・クラゲス氏にビデオ資料を見せたことが繋がって持ち上がった話であった。国際的にも非常に注目度の高いイベントになることが予測され、山形発のランドスケープアートが国際舞台で評価されることで、コンテンポラリー芸術によって起こされる地域の新しい文化創造の発展に弾みがつくものと思われる。このプロジェクトが成功することにより、地域アイデンティティーの更なる高揚を促す事が大いに期待される。

後述するがこのプロジェクトは、残念ながら地球温暖化の影響で寸前にキャンセルされてしまった。



第1回最上環境芸術祭参加作品 伊藤 存「新庄浮景」



同、城 浩太郎「一焔めきの最上」



同、松倉 浩「ピンホールカメラ穴録館」

新庄市中心商店街空き店舗にて展示。



同、安部定十池側隆之「生命線E・140° 18' 18"」

同、空き店舗にて展示。



第1回最上環境芸術祭参加作品 安部 定「最上颯爽」



1996年10月新庄市にて「最上颯爽」



空から見た「最上颯爽」

4. ドイツ・リンダウ市から企画依頼

1999年2月9日

リンダウのランドスケープアートについて

親愛なる 安部様

ドクター・クラゲス氏との話し合いの中で、あなたがボーデン湖周辺で大変魅力的なランドスケープアートを実践しようとお考えになっていることを知りました。彼から見せていただいた、あなたが日本で行った際のビデオテープを拝見して私はこのプロジェクトをこの地で行うことを心地よく想像することができました。

国際的な観光地であるリンダウの観光局長として、あなたの非凡なプロジェクトに大変興味を覚えました。芸術の分野で、ここボーデン湖からドイツを越え、ヨーロッパを越え、日本にまでその光を当てることは大変名誉なことです。その為にも我々としては西暦2000年にこれを行うことが最適だと提案いたします。

1. 2000年の6月にリンダウとリンダウ島を結ぶ橋が拡張されます。この工事にともなって、約800万マルクが予算として組み込まれています。
2. 2000年6月末に第50回目を迎えるノーベル賞受賞者が集う会議がこの地で開催されます。
日本からは江崎玲於奈（筑波大学学長）博士を招いています。
氏は物理学者の中では常連参加者に入り、既に6回この地を訪ねてくれています。もちろん2000年にも招待されます。

この記念すべき会議のことは既に各国の報道機関に注目されています。その上、日本の芸術家がこのよう特別なプロジェクトをプレゼンテーションすることは、メディアにとってもさらに魅力的なものになると確信します。

プロジェクトを行う最良の場所として、本土とリンダウ島をつなぐ“クライネゼー（小さな湖）”と呼ばれる水

深2mほどの湖の一部を考えています。

ドクター・クラゲス氏と私は今後必要な許可を取ることに全力を注ぎます。それ以外にもあなたが地理的に理解、鑑定できるように提示したいと思います。

リンダウより心よりの挨拶を送ります。

ハンス・シュトゥップナー / Hans Stuebner

5. 経 過

’98年8月 ドイツ・ボーデン湖畔の町メーアスブルクで、ドクター・クラゲス氏とボーデン湖沿いのどこかの町で防鳥テープを使った「最上颯爽」のドイツでの展開について話し合う。

’99年2月 ドクター・クラゲス氏の知人でリンダウ市観光局長シュトゥップナー氏から2000年6月に当地で開催する第50回目のノーベル賞受賞者の会合とリンクして「最上颯爽」をボーデン湖上のKleiner Seeで実施してほしいとの依頼が入る。

’99年7月 リンダウ市を訪れ、会場となるクライネゼーおよびリンダウ島を視察。シュトゥップナー氏ほか関係者と場所の選定、テクニカルな打ち合わせ等実施に向けて具体的な話し合いを行う。概要固まる。

’99年秋冬 ファックスを使って頻繁に連絡をとる。この年の夏、ヨーロッパを襲った大水の被害がボーデン湖にも及び、リンダウ島が水没した影響で、橋の架け替え工事がかなり遅れていること。これによって実施時期を変更しなければならなくなる。
地球温暖化の影響である大水の被害は以降毎年ヨーロッパを襲うことになる。

’99年11月 ミュラー市長宛にプロフィール及び計画書を提出。

’00年1月 リンダウ市において市長選があり現職のミュラー氏から女性市長のベルントゥザイドル氏に交代する。

’00年3月 ベルントゥザイドル市長宛再度プロフプロフィール及び計画書を提出。

’00年4月 リンダウ市議会において全員一致で支持を受け、実施に向け材料調達等具体的な準備に入る。

’00年5月 ドクター・クラゲス氏からウォーターポリスからクレームが付いているらしい理由がわからないので調査中と連絡が入る。5月末にリンダウ市長及びシュトゥプナー氏より当地が自然保護地区であることなどを理由にキャンセルされたと断りの連絡が入る。

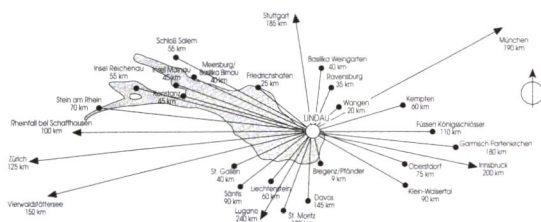
6. リンダウ市の位置

リンダウ市はドイツ南部バイエルン州南端に位置し、スイスとオーストリア、ドイツが国境を共有する保養地として有名なボーデン湖に面している。夏にはヨーロッパのみならず世界中から観光客が集まり賑わう。また、リンダウ市はボーデン湖上に浮かぶリンダウ島と陸地の街からなりこの2つは現在では橋でつながれている。リンダウ島にはカジノもあり、また毎年6、7月にはノーベル賞受賞者の会合が開かれる事で知られる国際的な街でもある。



ボーデン湖に浮かぶリンダウ島とクライナーゼー。対岸はスイス。

夏になると、湖面をヨットがにぎわう。雪を頂いたスイスアルプスも間近に望むことが出来る。西となりの町は夏の湖上コンサートで有名な、オーストリアのブレゲンツ。また東またどなりにはツェッペリン号などの飛行船の離発着基地だったことで有名な、フリードリッヒスハーフフェンがあり、特に夏期は世界中の観光客でにぎわう一大リゾート地である。この舞台での成功はまさに山形のランドスケープアートの存在を世界に知らせる大チャンスである。



リンダウ島の位置



ボーデン湖とリンダウ島周辺の環境

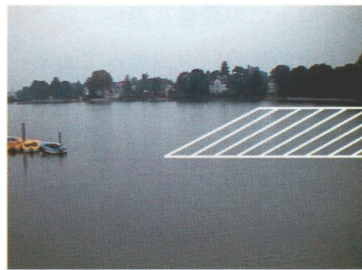


リンダウ島とクライナーゼー

7. 現地視察



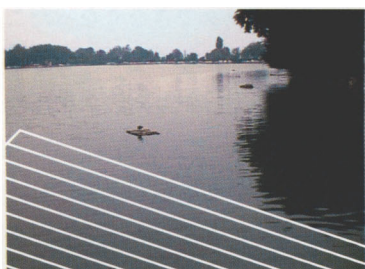
現在建設中の「Neue Bruecke」とドクター・クラゲス



リンダウ島北西角のプライベートゾーンを望む

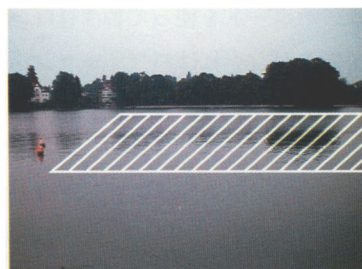
建設中の新橋から設営地までの距離を確認する。夏のハイシーズンになるとボートやヨット、カヌーなどを楽しむ観光客でにぎわうことになる。これらの対策も必要となる。

北西部の岸にはプライベートゾーンがあり、ここから南側一帯は設営することが出来ない。コンGRESホール前より北側を望む。



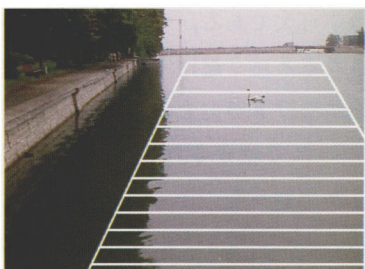
北西岸のプライベートゾーン。水鳥の営巣風景

北西岸のプライベートゾーン近辺には水鳥が巣を作っており、この一帯も設営することは出来ない。また対岸の南西岸はボートの係留地になっておりこの一帯も不可能。



リンダウ島より設営予定北東地区を望む（120m×300m）

設営地にはクライナーゼーの北東岸となることに決まる。スケールは新橋に沿って南北120m、東西に300mになる。



北岸の接岸部状況。係留用のハーケンが使えるか？

設営にあたっては湖底から杭を立てる部分と、岸辺に設けられている係留用のハーケンを使う方法などが検討された。



ノーベル賞受賞者の会合が開かれるコンGRESホール

南岸にあるコンGRESホール。毎年初夏に行われるノーベル賞受賞者の会合の舞台となっている。

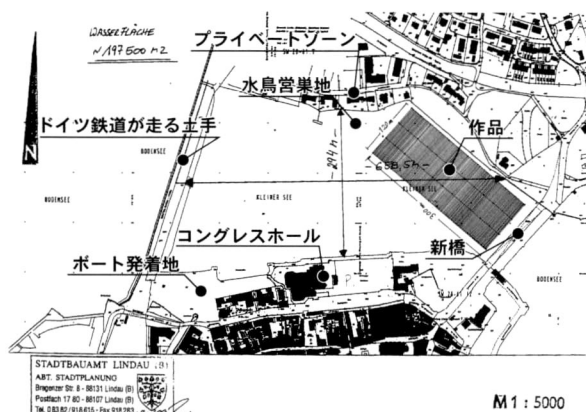
8. 実現に向けて実施プラン

新庄で行った陸上での設営と違い、湖の上に設置するということでまつわる難題が山積みである。調査によると水深は平均2 m。最深部で4 m程という。湖底の地盤の安定した部分に杭を立てそれを柱に東西にワイヤーロープを張り支持体とすることでほぼ決定。北岸のハーケン handsの届くところにテープが張ってあると、切られる危険性があるということで、こちらもやはり岸から5 m程はなしたところに同様に杭を立て設営することとする。

防鳥テープは強風などで切れるおそれがあるので、2週間の設営期間中は必ず監視係りが待機することも条件となる。杭及びワイヤーなどの支持体は事前に現地で設営され、防鳥テープは日本の業者が提供してくれることになる。カヌーやボートを使って約3日ほどテープを張り渡す作業があるが、それはパフォーマンスとして私とスタッフで行うこととなる。テープの撤収は1日。杭の撤収は後日業者によっておこなわれることとする。

ただし、実施時期に関しては新橋の工事が大幅に遅れていることと、2年間続いた夏期の水位増加問題が大きく、このため当初予定していたノーベル賞受賞者の会合とリンクすることは不可能となった。協議の結果、2000年9月中旬の新橋の完成に合わせることで合意に到る。設営等のかんりの予算がかかるため、日本でも助成団体の協力を仰ぎ負担の軽減化につとめることとした。

ネット上で情報収集し、該当する助成基金に応募した結果、野村財団から50万円の助成金を獲得することができた。



クライナーゼーでの設営予定図

ボーデン湖での作品タイトルは「Glaenzende Ernte収穫の輝き」とする。

ブライベートゾーン、水鳥の営巣地、ボート、カヌーなどの往来など想像以上にスペースがとれない。検討の結果以下のように設営することで決まる。

9. 結果及びまとめ

'99年2月にシュトゥッパナー氏から提案された。山形発ランドスケープアートは実施が間近に迫った2000年5月にウォーターポリスから提出された警告書によって残念ながらキャンセルとなった。書面によると当地が自然保護区だったことが記されているが、後に問い合わせたところ、第一の理由は地球温暖化の影響で1998年以降毎年ヨーロッパを襲っている大水の恐れであった。このほかにも市長の交代、新橋の完成の遅れ、50回目のノーベル賞受賞者の会合とリンクできなくなったことなどいろいろな事項がかみ合わなくなっていたことは事実である。

寸前でのキャンセルだったため既に発注にかかっていた防鳥テープ等のキャンセルに奔走しなければならなかった。野村財団からの助成金も返納した。

ドクター・クラゲス氏をはじめとする支援グループがなおボーデン湖沿いの町での実現に向け周辺の市町村に働きかけてくれているが、ドイツも日本以上に経済状況が芳しくないため、今のところ良い返事はかえって来ない。

地方都市から世界へ向けてアートの発信が出来ることが「現代」を命題化したコンテンポラリーアートの地域への定着には不可欠である。今回は地球温暖化の影響でキャンセルされるという避けようのない事態に到ったが、今後も機会をつなげる努力を続けたい。今回の結末は国営放送のニュースで紹介されるなど注目度はかなり高かった事をうかがわせる。

今現在では、フィンランドから問い合わせが来ている。スムーズにことが運んだとしても実現にはまだ1~2年かかるだろう。十分に打ち合わせを行い是非実現にこぎ着けたい。

天災に見舞われることがないことを祈りつつ。

